



Title	財津愛象先生の思ひ出
Author(s)	丸山, 正三郎
Citation	懐徳. 1987, 56, p. 104-109
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90687
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

財津愛象先生の思ひ出

私は昭和四年旧制大阪高校文科に入学したが、この時漢文を担当して下さったのが財津愛象先生であつて、先生は前年昭和三年まで大阪高校の教授をしておられたが、昭和四年懷徳堂の二代目教授になられるとともに大阪高校の方は講師として従前通り漢文の授業を担当された。懷徳堂の方の講義は殆んど夜であつたから差支えがなかつたのである。先生はもと熊本県の御出身で、広島

高師より京都大学を出られ、学習院、第五高等学校教授を経て、大正十二年三月大阪高校開設とともに教授として赴任して来られたのである。先生は京大教授狩野直喜博士の秘蔵の門下であつたと伺っているが、性温厚篤実の上に学才に溢れ、当時の大阪高校の全生徒から慕われ敬愛された人間味豊かな方であつた。私も先生の教えを受けることにこの上なく喜びを覚え、後には先生の帝塚

山の御自宅に出入りするようになった。そして大掃除の日などはよく鉢巻をしてお手伝いをしたりした思い出がある。私の外にも大阪高校の生徒で先生のお宅へ出入りしていた人は何人もあつた。

丸 山 正三郎

懷徳堂の定日講義は大体週四回、午後七時より九時までで、主として經書の講義が教授及び講師によって行われていた。毎晩七時になると留守番のおばさんによって講堂わきにつるされた撃柝の板を打ち鳴らして開始を報せる。受講生は大抵二十人から三十人位で出欠はとらない。老若さまざまで職業もまちまちである。無論学力のほども問われない。むづかしい講義にいつも居眠りをしている人も何人もいたが、注意されることもない。いつも見当ちがいの質問をして食いきがり、困らせようとする老人がいたが、財津先生は鮮やかな応答ぶりで手際よ

くこなしておられたことを思い出す。当時大阪高校の生徒で定日講義に出席していた人が何人もあった。皆財津先生の影響で、今思い出しても、外山軍治氏（もと大阪外大教授、大高六回文甲、京大東洋史卒）、時野谷勝氏（もと阪大教授、日本史、大高六回文甲、東大卒）、今来陸郎氏（もと九大教授、西洋史、六回文乙、東大卒）、杉浦正一郎氏（もと九大教授、国文、七回文甲、東大卒）、藤枝晃氏（もと京大教授、東洋史、七回文甲、京大卒）等の外何人もいた。私も大高一年生の時から、やはり財津先生の影響で懷徳堂に通い、先生の「春秋左氏伝」の講義などに出席した。先生の講義は実に流



重建懷徳堂で講義中の財津愛象

麗で豊かな学殖に裏づけられ、鄭の大臣子産の外交活動など眼前に彷彿するかの如き名講義であったことを今でも思い出すのである。後年私が漢文教師として勤めていた甲南高校の藤岡茂先生が、五高教授時代財津先生とともに若手教授として親しくしておられた当時、財津先生が上のお嬢さんを亡くされたそのお通夜の席でお嬢さんのお骨を口に入れ噛みくだいて号泣されたという話を伺ったことがあるが、先生の人柄の一端を示すものと思う。先生の奥さまのお話では、初代教授の松山直蔵先生が非常な勉強家で、一夏猛暑の時、懷徳堂の鉄筋コンクリートの書庫に閉じこもって勉強され、それが身体にこたえて病気になるれ、遂にお亡くなりになったということ、はじめ財津先生が懷徳堂教授に就任されることに大反対されたということであったが、先生御自身もまた過度の勉強のため四十七歳の若さでお亡くなりになったことは、返す返すも残念なことであった。

懷徳堂では上述の定日講義の外に、土曜日の午後文化学術講演が月一回行われていた。この方は京大の教授や名誉教授として高名な方の講演があり、その他にまた週三回午後四時頃から吉田助教による素読の授業が行われて、近所の小学生などが通っており、私も素読の授業

を受けたことがあった。

私が通った頃の懷徳堂、正しくは懷徳堂記念会の堂舎は、大阪市東区の東横堀川の本町橋東詰を約百米北へ行った所に、西向きに黒塗りの門があった。隣りは大阪府立貿易館があり静かな環境の所であった。門を入ると中央に平屋の大きな建物があり、その脇に二階建の事務所があった。平屋の大きな建物には記念講演や祭典に使う大講堂と小講堂が二室あり、それらは板戸の障子で区切られ、大きな催しにはその境界が外されて使用された。講堂の裏側に素読室があり、当時助教で後教授になられた吉田鋭雄先生が担当しておられた。そして事務室の二階は階段をはさんで教授室と書記室があった。教授は一人、あとはみな講師で、書記は今も健在でおられる藤塚誠二氏（昭和五十八年逝去―編集部注）であった。私は講義が済むとよく教授室に伺い、財津先生と帰路が同方向なので、よく御一緒に堺筋の本町二丁目交叉点まで歩き、市電に乗って途中でお別れすることが屢々であった。

毎年十月に先儒祭が行われ、印象に残っているのは、江戸時代の懷徳堂の門人であった人の子孫何人かが特に紋付羽織袴姿で献饌の行事に従っていたことである。そ

して祭典のあとには京大教授の先生方の記念講演があった。

財津先生に関する思い出をもう少し述べてみたい。倫敦の王立博物館に英人スタインが敦煌から齎した阿弥陀經、金剛經、千字文などの經文があり、それら經文の漢字には横に標音文字である西蔵文字でその発音が書きこんであって、当時の倫敦王立博物館紀要にその西蔵文字の発音をローマナイズしたものが発表されたことがあった。財津先生はこの紀要を親友の石浜純太郎先生からのすすめで借用し、この敦煌出土の經文の発音と、殆んど同時代の我国万葉集における万葉仮名の発音を対比せしめて、唐末から宋初に至る時代の音韻の研究に新しい一歩を進められたのであった。私は当時先生のお言いつけで何が何だかわからずにカード書きの仕事をお手伝いしたが、今日になってみると、先生はそういう作業をさせることによって学問研究の方法の一端を私に教えて下さっていたのであるとありがたく懐かしく思い出すのである。先生が「丹波」を万葉仮名で「タニワ」とよませている根拠を西蔵文字の発音で n と ng との違いとして區別したのはその一例であると話しておられたのを記憶している。

先生は後に京都の東方文化研究所の所長であった狩野直喜先生の推薦で、「詩経毛伝」の索引製作の作業に専念された。これは懷徳堂教授の傍のお仕事であったが、常に鞆の中にカードを入れておられ、授業の合間には必ずカードに書きこむ作業を続けておられた。これはもともと明治三十四年の義和団事件の賠償金を中国研究の文化事業に使うという趣旨の下に、東京の東方文化学院と京都の東方文化研究所とが設けられたもので、その事業の一部として「十三経注疏」の索引を、東京と京都の学者が各々分担して作製に当ることになり、財津先生がその中の「詩経毛伝」の作製を受持たれたのである。先生はこの仕事に余りにも根をつめ、孜々として倦まずに没頭され、遂に何時とは知らず病魔の侵すところとなってしまうれていたのである。その恢復のため昭和四年の夏頃から一時仕事を中断して養生せられることになったが、単なる疲労と思われていたのが、実はかなり腎臓病が進んでいたのがわかり、急拠阿倍野橋近くにあった大阪市民病院（今の大阪市立大学附属病院）に入院されたが、病勢が進んで、急に尿毒症を併発し、昭和六年十月四日未明に逝去されたのである。行年四十七歳の若さであった。私は夜半に先生の危篤の電報を頂き、驚愕して

取るものも取りあえず病院にかけつけたが、御臨終に間に合わなかったことは、かえすがえすも痛恨の極みであった。そして先生の父君が急拠熊本からかけつけ、御遺体の傍に坐っておられたお姿は今でも私の脳裏に刻みこまれている。その時父君から伺った所では、先生は生来動物がお好きで、幼ない頃、父君につれられて、熊本にきたサーカスの見物に行った際、象の前を離れられなかったので、幼名を改めて愛象という名前にしたとのことのお話であった。

財津先生の御逝去ほど私の人生にとって衝撃的な出来事はなかった。それは私の高校三年生の秋のことである。先生はその御生前私に対して懷徳堂には奨学金の制度があるから、君がもし大学の漢文学の方面に進むなら、学資の件は心配しないでもよいと洩らして下さっていた。先生がもし生きておられたら、私は恐らく先生の母校である京都大学の方に進んでいたであろうと思う。ところが先生がすでにお亡くなりになってみると、私には幼少の時別れた生母が東京の下町に住んでおり、兄や姉や親戚なども東京にいたので、いろいろと便宜が得られると思ひ、昭和七年春東京帝国大学の文学部支那哲文学科に入学した。ところが不幸は重なるもので、当時経

済界の大不況とそれに対する浜口内閣の緊縮政策により、一介の町工場の主であった父が、そのあおりを食って倒産寸前となり、遂に不慮の死を遂げるに至った。私の前途は真っ暗となり、学業放棄のやむなきに至ったのである。その時大阪高校の校長であった隈本繁吉先生が、財津先生と私の間柄を思い出して下され、隈本先生と東大の西洋史学科の同窓であった大阪府立図書館長の今井貫一氏に私の奨学金のことを頼んで下さった。今井氏は懷徳堂記念会設立の当時より理事としてその運営の實際に当たっていた方で、懷徳堂の会務はすべて今井氏の掌握されるところであつたのである。この今井氏と極めて昵懇であつた隈本先生が自分の学校の卒業生で、且つ財津先生の弟子とも言ふべき私を推薦して下さったので、それまで奨学金制度をやめる方向に進んでいられた今井氏も特別に金を出すということを承諾されたのであつた。このようにして私は学業を続けることができるようになった。懷徳堂の方から月々金三十円を途中から十円を値上げして四十円を為替にして大学卒業まで月々きちんと送って下さったが、それらはずっと書記の藤塚誠二さんにお世話になったのである。私は夏休みになると養母のいる大阪へ帰省したが、帰るとすぐ住友の総理事

で懷徳堂理事長をしておられた小倉正恒氏のところへ挨拶と近況報告に参上した。秘書の岡野さんに挨拶してすぐ帰ろうとすると、岡野さんから一寸待って下さいと言われ待っていると、あの繁忙な小倉さんがわざわざ秘書室まで出て来られ、黙って一介の青年にすぎない私の申上げることを聞いて下さったことにはひどく感激した。寡黙な方で私が帰省して参上した時はいつもそうであつた。戦後小倉さんの御葬儀が青山葬儀所であつた時お参りしてたまたまそこにおられた岡野さんにお会いして往時の御礼を申し上げたところ、僅かな立話の中で、小倉さんが懷徳堂のことをいかに心をこめて考えておられたかということと話しておられたが、今日私が懷徳堂から受けた恩義がいかに大きなものであるか、懷徳堂なくしては私の生涯がなかったほどに思われ、改めて忘恩の徒であるわが身が恥かしくてならないのである。

更に私は東大卒業と同時に、再び隈本先生の御推薦で兵庫県七年制甲南高等学校に漢文の教師として赴任したが、甲南高校はやはり昔財津先生が講師をしておられた学校で、同僚の先生の中には財津先生と親しかった人が多く、因縁浅からざるものを感じさせられたのである。

昭和四年、私が大阪高校に入学した年、天皇陛下が大
阪高校に行幸せられ、校庭で生徒たちの剣道野試合やラ
グビー競技を天覧せられたが、その時財津先生が作られ
た七言古詩が残っているが、天皇陛下がラグビーを御覧
になったのはこの時はじめてだということで、先生もま
たラグビーを歌った漢詩を作ったのは私がはじめてだと
自負しておられたが、ここにそれを紹介して先生を偲ぶ
よすがとしたい。

昭和四年六月六日、車駕親臨大阪高等学校。賜謁教
官。且聞諸生演技於覺庭。余幸得陪之。感激不禁。恭賦
長古一篇。以聊表傾葵之衷。

講師 財津 愛象

昭和己巳夏六月 天子駐蹕浪華城
仁皇故宮籠煙火 豐氏旧壘長柴荆
維日壬午祥雲動 錦旗燦爛照軒楹
六百青衿齊稽首 五龍駕到肅候迎
鳳姿龍準天日表 連顏咫尺神光明
列朝元重庠序教 聖慈応納葵藿情
鼓声忽催演武技 分隊闘乱雷霆驚
劍影煜燁何所似 越騎曉斫甲公營

『斯文』八十六号（昭和五十八年三月発行）より転載。
旧字は新字に改めました。筆者の丸山氏は昭和六十年十二
月にご逝去されました。―編集部―